

日本漢字音と中国語の「破音」

黄本元

一、序

英語の中で、desertを[ˈdezət]或いは[diːzət]と言うように、アクセントによって意味を異にすることが多いか少ないか、精密的な調査はないから、ひと言に言えないが、readを[ri:d] [red] (p. 4) のように、同じ言葉を時間的な考慮で、別の発音をすることも少なからう。

台湾閩南語では、一つの音にどんな漢字を使うべきかと言う問題は、従来、多くの研究者に非常な関心を持たせて来た。例えば、[tɔŋ] (人間、人類、人) という言葉について、「人」か「儂」か「郎」か「農」か「童」か「俑」か、当て字がいろいろある(注1)。また、[tan] (金をもうける) について、多くは、「趁」という字を当てる。が、現代中国語(北京語)に、「賺錢」(金をもうける)の「賺」から考えればいいではなからうか。意味はもちろん、現代中国語のように、「もうける」と同じだが、音韻からは立証が出来るのではなからうか。『学研 漢和大典』(学習研究社)によると、「賺」は、デン(デム)呉音で、タン(タム)漢音で、二つの音で読むのである。これ

をまた、台湾閩南語と日本漢字音の歴史的背景を考慮に入れて考え直して(注2)、きつとこの「賺」という字で解決できよう。音韻から考えて妥当ではないと思う意見もあるが(注3)、韻尾日が、ロに転じて使おうという用例は、台湾閩南語には、ほとんどないと言えようが、これをその一つの用例で、つまり「誤読」から生じたと見てよいのではなからうか。

日本語のばあいと成ると、どう成っているのか。台湾閩南語のように、どの漢字を当ててよいかという問題は起らないが、台湾閩南語のように、「一字に多音」という現象がある。台湾閩南語では、「長」を[ʔɔŋ] [ʔɔŋ] [ʔɔŋ] [ʔɔŋ]などで読むことが出来る。日本語の漢字にも、こういう現象が見られる。例えば、「本」に、ホン、モト「元」に、ゲン、モト「読」に、ドク、ド、ヨミ、ヨムなど一字に多音がある。逆に、「モト」という音に、本、元、源、基「ハル」に、春、暖「フユ」に、冬、寒「コ」には、小、故、個、蚕、子、木、粉、籠、戸、孤、弧、鼓、此などのようなものがある。いわゆる一音に多字である。が、このような複雑な言語現象を生じて来たのは、日本語というものは、もとより文字のない言葉で、文字(殊に、漢字をさす)を外国から借用したのであ

ろう。日本の漢字の音に訓読みを除外して、呉音、漢音、新漢音、唐音、宋音などいろいろの発音があるのも、外国から借用して外国の発音をはとんどそのまま借用して努力して取り入れたのである。

ところが、われわれは、人間としてコミュニケーションをするために、いろいろな工夫をして来ても、そこには、いろいろな問題が出て来る。どんなに言語の三要素である形、音、義を巧みに利用しても、文字言語と音声との間に、きつとへだたりを持っている。英語も、台湾閩南語も、中国語（北京語）も、日本語もきつといろいろな問題が見出されよう。これは、各々言語自体に差異が存在するから生じたのであろう。日本語が、中国語から漢字の使用を取り入れるには、複雑な現象を生じたのも、言うまでもないのである。台湾閩南語は、漢語系に属するものであるにしても、長い時間を経て、その一部分音だけ（？）残して、文字と非常にへだたりを持っているようになるのである。このように、各言語自体に本質或いは歴史的背景が違ふから、いろいろな差異、複雑な現象を生じて来たのである。この形、音、義三つの言語要素の応用もだんだん複雑になって、いままでも考えなかったことも、しばしば出て来るのである。

次に中国語の場合となると、どう成っているのか。中国語（漢語をさす）とは、音から言えば、いわゆる単音節で、文法的構造から言えば英語のような屈折語ではなく孤立語であり、また声調を有する言語である。単音節と言うと、「玫瑰」「琵琶」「玻璃」「囉唆」「疙瘩」などの単音節の言葉（二つの morpheme を持つ言葉）もある。これは外来語から生じたもので、「甬」「回」「花兒」などは音韻の合併（省略、約音）の結果から生じたものである（注4）。しかし、「漂亮」「骯髒」「瀟灑」

「蜘蛛」（？）「鴛鴦」（？）「蕭條」「胡塗」なども単音節の双 morpheme を持つ言葉である。これらは、外来語だと簡単に考え定めるには行かないであろう。これらは、中国語の中の「疊韻詞」「双声詞」という構詞法から出て来た言葉だと見てよいのではなからうか（注5）。

前述したように、中国語は、単音節を持つ言語である。「一音に多字」或いは「一字に多音」という現象は、表現力を効率的に發揮するために、やや宿命的で、まぬがれないものであろう。例えば、うさ (yā)（補註）に、脖、白、柏、舶、帛、伯、鉞、泊、箔、百、字、鵲、淖、勃、溲、博、搏、薄、礪、駁、葡、鉞、踏などの字がある（注6）。那には、hā、hā、hūoなどの音がある。前の例字から見れば、中国語（漢字をさす）の中に、「形声字」（声符を持って新字をつくること）が一番多いため、音に多字が出て来るのであろう。

「一字に多音」から考えると、次のようなものがある。「遠近」「遠不如」の遠は い (yuǎn) と読むが、「君子遠庖厨」「親君子遠小人」「敬鬼神而遠之」の遠は い (yuǎn) と読む。「給銭」の給は げ (gěi)、「自給自足」の給は じ (jǐ) と読む。「弾弓」の弾は、だ (dàn)、「彈性」の弾は、だ (tán) と読む。このように、中国語に、一字に多音の字がたくさん出て来る。これは、中国語の中の一つの特色と言えようが、学習者（外国人にも、中国人にも）に非常にやっかいなことをもたらした。中国語のこの現象が、どうやって起って来たのかについて、はっきり言えるものではないと思うが、日本語の漢字音の「一字に多音」の現象に中国語と何かかわりを持っているかについては、検討するに値するものである。本論文は、現時点における中国語の「一字に多音」の現象を論じて、それから、それをもと

にして、日本語の漢字音に、この中国語の「一字に多音」の現象が、どれぐらい影響を与えたかについて検討して、究明しようとしてみたいものである。

二、中国語の「破音」

中国語の中の「一字に多音」現象は、多音字、歧音字、歧音異義字、破音字などの名称で言われている（注1）。名称から見れば、複雑なようではあるが、みんな同じものを言うのである。本論文では、字を脱落させて「破音」という名称を用いるのは、便宜的である。ほかに、これを同字異音、異義異音と称するものもある。

「破音」とは、何かというと、『中国語学新辞典』（中国語学研究会編 光生館）によると、

読破の現象、すなわち字義の分化に伴い、字音の一部ことに声調を区別して、その派生義を弁別する現象。

と言っている。また、

破読 pò dú（破音異読）ともいい、広く一字の転音現象をさす場合もある。

本来、語義が分化する過程には、その音節の一部に変化をきたして、原義から派生義を区別し、その相互間にまとまった語彙としての親族関係が結ばれうる。歴史的には、漢語は単音節を基本単位とするため、接辞などの付加成分を伴う変化を起こしにくく、音節内の声母、韻母、声調の変相に（一交替）よってそれを示した。

と言っている。つまり、「破音」は、字の転音で、派生義を生じ、或い

は、文法的機能や語義の分化する過程によって字の転音（音節の声母、韻母、声調の変化）を生じたのである。

この現象について、注3にあげた『国音学』の中で、①正読、又読、②語音、読音、③歧音異義の三種類に分けている。正読は、中国語の標準語（普通話、北京語をさす）のヨミをさすもので、又読は、方言、俗語、習慣的誤読のヨミをさすものである。語音は、口語の音（ヨミ）で、読音は、中国の古書（^キ）を読む時に、特別使うべきヨミである。歧音異義字は、その字の音も多様で、義（意味）も異っているものである。また、同書にも、辨義（意味を区別する）的機能を持つ「破音」が、一番重要で、それがなければ、言語としての意味がなくなるのではないか、文字の供給（新しい文字をつくること）が、この時代の進歩に及ばないで、従来の文句を借用しなければならないのだと述べてある。（前掲した『国音学』p.340を参照。）

前掲した『国音学』には、「破音」を従来の名称で分類したのに対して、『光生館 中国語学新辞典』には、言語字の立場から、「破音」について解説をした。次に、一つの試みとして、前掲した王天昌 著『漢語語音学研究』の破音資料（p.363からp.386までの用例）を音の面から分析してみよう。中国語の語音から言えば、声母、韻母（介母を含む）、声調がある。それにあげられたのは、278字で、常用のものである。その中で、「一字に四音」のものは、6字だけで、「一字に三音」のものは、42字で、「一字に二音」のものは、226字である。全部あわせて278字ではあるが、「一字に二音」がその大部分を占めている。「一字に二音」の中で、その二つの字音の声母、韻母が、まったく同じで、声調だけが違うものは、138字で、声母だけが違うものは、40字で、韻母

だけが違うものは、ㄆ字で、声母、韻母両方とも違うものは、ㄆ字である。「一字に三音」のなかで、その三つの字音の声母、韻母が同じ声調が違うものは、ㄇ字で、声母が同じで、韻母が違うものは、ㄈ字で、韻母が同じで、声母が違うものは、ㄨ字で、声母、韻母、声調の中で、二項以上のものが違うものは、ㄨ字である。

次に、前掲した用例から、従来の「破音」をそれぞれ検討してみよう。

「天涯若比隣」の比をㄅ、ㄆ(BI)と読むと、正しいと思うが、ㄅ、ㄆ(PI)と読んでもいいと思う人もいるであろう。「心寛体胖」の胖をㄆ、ㄆ(PAN)か、ㄆ、ㄆ(PANG)か、どちらで読めばよいかはつきりしない人が多かるう。ところが、「歐風東漸」の漸をㄆ、ㄆ(JIAN)と読むと、いまの段階では、おかしいと思わない方は、まずないであろう。「反切」の反をㄆ、ㄆ(FAN)と読んで、ㄆ、ㄆ(FAN)と読まない方もなかるう。「匹敵」の匹をㄆ、ㄆ(PI)「一打鉛筆」の打をㄆ、ㄆ(DA)とよむが、ㄆ、ㄆ、ㄆ、ㄆとよまなかるう。が、後の読みが、前掲した資料の用例によると、いわゆる正確な音である。が、注意すべきことは、どうして以上の字が、習慣的な読み方一辺倒になるのか。また、胖のように、二様の音のどちらでよんでもいいと思われるようになったのは、また何故であろうか。これは現代の中国語(ここでは、台湾地区に中華民国六年以降に行なわれる標準語をさす)が、時代の変遷に伴い、すこし変化を起しつつあるのであろう。もとより二つの音に分けて各別に使われた「破音」も変化を起していることと言えよう。多くの「破音」が、だんだん混同して行つて、統一即ち、一つの音になっているのである。だから、いまの段階では、前掲した用例にあげられた「破音」を、新しい時代の変遷にそつて、もっと簡単に、もっと速く習得出来る「破

音」に成らせなければならない。つまり、「破音」をもっと簡単にして減量しなければならないのである。でなければ、「埋怨」の埋は、ㄇ、ㄆ(MAI)と読んではいけない、「滑稽」の滑は、ㄆ、ㄆ(HUA)と読んではいけないように成るのではないか。これは、言語変化の自然性にそむくのではないか。

前述したような観察によつて私は、前掲した用例を逐字に検討をした。だいたい前掲したㄆㄆㄆ字の「破音」を次のㄆㄆㄆ字に減量して行くこととする。

勝 傍 扁 便 漂 屏 鋪 沒 否 分 縫 得 待 當 的
調 都 那 難 樂 累 勞 量 給 乾 冠 空 喝 和 荷
好 號 會 還 假 教 禁 將 降 奇 強 曲 校 相 興
行 雪 朝 著 中 種 重 差 長 處 傳 少 省 盛 屬
數 率 載 藏 曾 參 從 掃 散 阿 惡 要 為

などのㄆㄆㄆ字である。ほかに、ㄆㄆㄆの中に、一字に三音か四音のものの一部を削除して、二音だけ残してよいものもある。例えば、差にㄆ、ㄆ(CHI)、ㄆ、ㄆ(CHAI)を残して、那にㄆ、ㄆ(NA)、ㄆ、ㄆ(NA)を残してよいと思う。以上のㄆㄆㄆ字は、いまの段階では、まだいいと思うが、将来、もっと少なくなるかも知れないが、これは、言語変化が、社会の応用面において自然に起こることなのであろう。また、その中で、「一字に二音」ではあるが、再検討に値するものも残っている。例えば、「便利」の便は、ㄆ、ㄆ(BIAN)とよんで、「便宜」の便は、ㄆ、ㄆ(PIAN)とはっきり分けて読むのであるが、「大腹便便」の便便は、正確な音(前掲した資料の用例による)のㄆ、ㄆ、ㄆ、ㄆ(PIAN PIAN)とよまないで、ㄆ、ㄆ、ㄆ、ㄆ(BIAN BIAN)とよむようになった。

つまり、混用する状態も見られるのである。「品行」、「操行」、「暴行」「言行」の行は、正確な音でよむと、T'ing (SHING) に成るべきだが、そう限らない。こういうように、めちやくちに混用する場合もある。が、前掲した用例から見れば、その大部分が、「破音」のことをはっきり守って使っているから、いまの段階では、それを減量の対象にしない。

減量のことについてすこし述べたが、どうやって「破音」に減量を与えるのか、すなわち、どんな観点で、どの面から考えて減量をするのかというのが、肝要である。前述したように、台湾地区にいまの段階で行なわれる現代の中国語が、生きた言語で、時代の変遷、使用者の用字意識(常用か、非常用か)などのことで、変化しているのも、ものすごく使わない「破音」を削除する必要があると思う。それによって、前掲した王氏のあげた用例を整理して見ると、次のようである。

一、混用が出来るもの、すなわち、混用しても辨義(意味を区別すること)に障害を与えないもの――

前後夾攻、皮夾子、夾竹桃 の中の夾を^リイ(JA)で読んで解決できよう。法国、法律、想法子の中の法は、^フイ(FA)とよんで、中華、法華經、華山の中の華は、^フイとよめば、解決できよう。

二、ほかに用字があるもの――

一暴十寒 の暴を曝で、背書包の背を措で書いて、二字に分けて使って、こんな「破音」がなくなるのではないか。雪茄煙の茄を加と書けばいいのではないか。

三、現代の中国語の中で、あまり使わない言葉(方言の語いを含む

によって生じたもの(注8)――
大伯子の伯^バ (BĀI)、簸箕^バ (BŌ)、奶勝子の勝^バ (PANG)、皋比の比^バ (PĪ) 便宜坊の便^バ (PIĀN)。

四、現今、常用される当該の字の音で読めばいいもの、即ち、地名、人名、動植物名、ほかに音訳の外来語などなどのもの――

繁^フ (FŌ)、番禺県の番^フ (PAN)、單于の單^フ (CHĀN) 單縣の單^フ (SHĀN) 玳瑁の瑁^フ (MEI)、般若^フ (BO RE)、法国の法^フ (FĀ)、身毒の身^フ (JIAN)、冒頓^フ (MO DUN)。

と言うようになる。以上の観点から従来の「破音」を検討して、75字を残していればいいと思うのである。ほかに、討論に値するのは、文章語読み(特に古書語の読み)をどう扱うべきかと言うのである。董季棠『減少破音字芻議』(中国語文 52巻4期)の中で、この点について、もし「我」を^ワ ()と読めば、あまりにおかしいと感じられると言っている。また、詩歌を詠む時に、特に「押韻」をする時に、「北、黒、賊、白」を^フ (FŌ)、^フ (FŌ)、^フ (FŌ)、^フ (FŌ)と読まないと、入声がなくなると、「押韻」にはならないと述べている。これは、文学的鑑賞から言えば、理屈にそむかないであろうが、言語学の研究で解説を加えて言うならば、必ずしもそうには行かないであろう。と言うと、「入声」そのものが、現代の中国語から消えて行ったから、このように「破音」を利用して、「入声」をすぐ取り戻すことが出来るはずはなからう。もし、音の面から文学的鑑賞の品質を高くさせることがあるならば、それをいまままで「入声」を完璧に保存して来た台湾閩南語、台湾客

家語で読めばいいのではなからうか。だから、現代の中国語で、通用、常用という面から、文章語読を扱えばいいと思う。そのうえに、どのような文章語の読みが正しいか或いは、どの時代の読みが正しいかと言うことについて、まだ決定的な説が出ない（注 9）から、現代常用の中国語で、文章語を読むのが、当然のことであろう。つまり、通用、常用の面から、文章語読みの減量を考慮に入れて、それを決定するのは、より適当なのではなからうか。

以上は、いろいろな面から、「破音」に減量をする理由を述べて来たが、「破音」が、声調、文法的機能（構造）との間に何か関係を持っているか持っていないかについてすこしもふれなかった。次に、この問題について述べよう。梅広「文字表達與破音字問題」（中国語文 51 卷 3 期）の中で、「破音」がはっきり覚えられるかどうで、いわゆる国語（中国語）の表現力を判断するのはものすごく無理だと言っている。梅広氏の統計によると、現代中国語の中に、「破音」を持っているものが、四分の一に達する。これが学習者に非常な重荷になっているから、減量をしなければいけないのだと言っている。また、「勝任」の勝を、みんな四声で読むようになったならば、一声を捨ててもいいと述べている。そして、

從声韻學的觀點看、破音字的讀音不一定都是可靠的。

と言っている。声韻学の立場から見れば、「破音」のことは、あまり決定的な証拠がないものが多いようであると言っている。が、古代の文献資料にいくつかの例が見られる（注 10）。また、漢語系に属する台湾閩南語にも、種、長、重、などのような文白系統（文章語読みと口語読み）と関係のない、声調だけで意味を区別することが出来るものがある。即

ち、「破音」の現象で意味を区別するものである。台湾閩南語が、深い程度まで、漢語系の古い形を保存して来たのは、周知のことだが、これは、中国語（漢語）が、古い時代から「破音」を持っていることを示しているのであらうか。

ところが、いまの段階では、「破音」が、意味を区別するには、絶對的な機能を持っているのか、そうには行かないであらう。例えば、「玩耍」、「玩笑」、「玩命」の玩が、「玩物喪志」、「玩世不恭」、「玩法弄權」の玩と、文法構造から言えば同じなのに、どうして前の玩を二声で後の玩を四声で読むのであるか。また、文法構造にこだわらないで、「説服」、「説客」の説を同じ音で読めば、「聞人」の聞、「聞一知十」の聞も、同じ音で読めば、当該の言葉に意味の混乱を起すのであらうか。前例の玩も、同じ意でよめばいいではないか。つまり、前述したように、漢語の中に、この「破音」の現象が、昔からいままである程度で、意味を区別するには、重要なやくわりを持っているが、前掲した王氏のあげた用例のように複雑な「破音」を持つ必要はないのだと思う。特に、前にあげた削除すべきもののような「破音」をしっかり守るは、無意味なことであらう。もし、従来の「破音」をだんだん減量して行つて、現代中国語における「破音」が、だんだんなくなって行くなれば、これは、次の学習者にとって一大恩恵であらう。次の世代の国語（中国語）の習得に、より效率的に行なわれるのであらう。現代中国語の応用面において、字数、語いが足りないと言えないであらう。問題に成るのは、漢字の繁瑣、音の繁瑣（一字に多音、一音に多字）などであらう。だから、そんなに繁瑣で複雑な「破音」を持って表現する必要はないと思う。これは、同じ一字に音、声調、詞性などを持って意味を区別して表現する

には、まったく不必要だとは思わないが、できるだけ減量して、気軽に習得できる方が、よりよいのではなからうか。

董季棠氏の前掲文の中に、

「破音字」減少了、新体字増加し、負擔可能更重。」

と言っている。「破音」の減量にしたがって、新しい文字が、きつと増えて来て、また、新しい重荷になるであろうと思っている。が、新しい文字となると、これは、証拠のない理屈に合わない考えであろう。女、弟、知、與などに「破音」を持って解決できるのか。汝、悌、智、歟などが、すぐ要らなくなるのか。汝、悌、智、歟、のそれぞれに、意味用法、語い構成を持っているのではないか。これらは新しい文字ではなく、新しい重荷にも成りえないのではなからうか。

三、日本漢字音と中国語の「破音」

「日本漢字音」とは、「朝鮮漢字音」、「越南漢字音」などと対立して呼称されるものである。日本が、中国文化を担った漢字を移植し定着させて来、その漢字の移植と定着の過程において、各々の漢字が、移植の時点において保存していた中国語音が、捨て去られることなく定着したものが、日本漢字音である。即ち、その母胎は、中国語の漢字の音である。

一つの漢字に、各々異なった音形が伝承されており、それが、単に一字一字の個別的な問題としてではなく、それぞれ異なった名称で代表される体系的な背景を持って伝承されて来たものである。それが、呉音、漢音、唐音というものである。次の実例をみてみよう。

漢字	行	經	瓶	木	脚	頭	宮	遲	和	暖
漢音	ギヤウ	キヤウ	ヒヤウ	モク	キヤク	ヅ	ク	デ	ワ	ナン
唐音	アン	キン	ヒン	モ	キヤ	チウ	キユン	シ	ヲ	ノン

のように、こんなに特異な現象が、他の多くの漢字についても存在する。すなわち、それが、時代と方処とを異にする体系的な中国語が日本に間歇的に移植され定着して、融合或いは混淆することなく日本語史上を生き続けて来たことを物語っているのである（注 11）。こういう表を見れば、日本漢字音には、「一字に多音」の現象がある。これが、中国語における「破音」の「一字に多音」の現象と同じものなのか、また、日本漢字音が、中国語の「破音」と何か関係を持っているのかなどの問題について、中国語の「破音」をもとにして述べて見よう。

前掲した王氏の用例と『角川 国語辞典』（角川書店、昭 52 年）の「当用漢字音訓表」の漢字と対照して、音訓表にない漢字（王氏の用例）を除外して、その字音（『学研 漢和大事典』（学研研究社、昭 52 年）による）を整理して次のようである。1. 呉音、漢音、唐音、または慣用音などが整然とはつきりしているもの 2. 二様の音（或いは二様以上）があるもの という二種類である。そして、二様の音を持っている実例が、72 字に達する。二様の音と言うと、ふつう言われる呉音、漢音、唐音などのような区別ではなく、前掲した『漢和大事典』によって、

音の相違が意味におよぶ場合は、口口によって区別し、音と意味とを対応させた。（凡例(5) 音、訓、読み）

とのことである。この項目から考えれば、「音の相違が意味におよぶ」

という点で、中国語における「破音」と非常に似ている。次に前に述べた中国語における「破音」の観点で、それぞれの音を観察して検討してみよう。その結果は、次のようである。

1 中国語の「破音」と同じもの――

楽	ガク音楽	乾	ケン乾坤	重	ジュウ重要、重大
ラク楽園		カン乾燥		チヨウ重複、重陽	
悪	オ 憎悪、羞惡				
アク悪習					

2 現代日本語には、一音しか常用されたもの――

員	(1) ウン、イン	速	(1) ダイ、タイ
	(2) エン、エン	(2) ダイ、テイ	ナ
難	(1) タン、ダン	(1) ビ、ヒ、ハイ	
	(2) ナ、ダ	(1) ベ、ハイ	

3 二様の音で、二様の意味であるが、同じ一つの音を持っているもの――（注 12）

予	(1) ヨ、ヨ 予一人、予小子、
	(2) ヨ、ヨ 予見、予言、予感
扁	(1) ヘン、ヘン 扁舟
	(2) ヘン、ヘン 扁額
鮮	(1) セン、セン 鮮少
	(2) セン、セン 新鮮、朝鮮
禪	(1) セン、セン 禪宗、坐禪
	(2) セン、セン 禪讓、禪位、封禪

というようなものが見られる。字数から考えれば、1の方が一番多い

が、3の方が一番少ない。1に出て来るものは、中国語の「破音」をそのままで伝承したと言えよう。2に出るのは、だいたい時代の変代に従ってだんだん常用されて固定されたのであろう。が、前述したように、中国語の「破音」の中に、声調だけで、意味を区別するものが、その大部分を占めている。日本語が、それに相違して、わずかな用例がある。これは、何を意味するか、というのであるか。そして、3に四字があるが、予、扁二字に、また別の字があるから、「破音」と認めなくてもいいと思う。また、最後の二字が、中国語で言えば、整然分けられているが、日本語と成ると、声調がなくなつて「セン」一つの音に成るのではないか。だから、いわゆる日本語の「破音」の中に、声調で持つて意味を区別するものは、ほとんどないと言えよう。これは、だいたい日本語と中国語と、本質（言語体系）の相違から生じたのであろう。声調とは、中国語（漢語）の特有な現象である。ほかに声調を持つて意味を区別する言語があろうが、中国語のように、声調のように重要なやくわりを持つ国はなからう。それで、日本語が、中国語の「破音」を伝承するには、声調を捨ててしまふのであろう。それを取り入れるにしても、あまり日本語の本質にとけこまれないのであろう。が、少数の用例に見られるように、重要、重視、重大、体重などは、中国語では、「四声」で、日本語では、ジュウと読むが、重複、重畳、重陽、重修などは、中国語では、「二声」で、日本語では、チョウと読むのである。これが、単に声調のことで、よみ分けるのではなく、声母の清、濁にも関係を持つていたのであろう。例が少なく、体系的にならないものは、それを解決するには、まだ早いものである。ほかに、「種類、種花、種植」の種、「長老、長女、長男、班長、長大、長久、長刀、長寿」の長、などのよ

うに声母の清、濁、文法的機能（構造）、声調などを全然無視して一つの音になり、中国語（台湾閩南語も同様である）のように、「破音」の意味を区別することがないのは、言語体系の相違で、取り入れにくいのであろう。

以上述べて来たように、日本漢字音が、呉音、漢音、唐音などのように分けられるが、ほかに、中国語の「破音」をそのまま取り入れるものも見られる。中国語の「破音」と相違するのは、日本語が、「破音」を取り入れても、中国語、特に現代中国語のように、言語習得にその繁瑣なことをあまり残していないのであろう。また、中国語の「破音」のように声調を意味区別の手段とするものが、あまり見られないのも、一大特色である。これは、日本語が、中国語を伝承した当時、中国語があまり声調を持って意味を区別することはないことを示しているのか、或いは、前に述べたように、日本語の本質から相違が出て来るのか、ということに、容易に判断を下すことが出来ないのではなからうか。はっきりと言えるのは、日本漢字音には、体系的に呉音、漢音、唐音などを取り入れると同時に、中国語の「破音」をも取り入れたと言うのである。数が、現代中国語の「破音」に及ばないと言っているのである。その個別的（？）に取り入れられたものを、便宜的に、日本語の漢字音の中の「破音」と称したい。いわゆる日本語の「破音」は、中国語のように多くて複雑なものではないから、日本語にはあまりやっかいなことを生じて来ない。ところが、日本語の漢字音に、多様な読みが出て来ることが、言語習得、言語の応用において、あまり効率でなくて、もっとよい、より簡単に習得出来る、応用できる方案を見出すことも非常に重要なことであらう。

注 釈

1 洪惟仁著『台湾礼俗語典』（自立晚報出版）の p. 73 を参照。
2 黄本元「入声韻尾の研究——いわゆる新漢音と閩南系方言との関係」（東呉日本語教育第9号）を参照。

3 林金鈔著『南語探源』の p. 32 を参照。

4 国立台湾師範大学国音教材編輯委員会編纂『国音字』（正中書局印行）の p. 61 を参照。

5 王天昌著『漢語語音学研究』（国語日報出版部）の p. 250 を参照。

6 注5に掲げた王氏の著書の p. 362 を参照。

7 注5に掲げた王氏の著書の p. 335 を参照。

8 「あまり使われない言葉」と言うが、あまり精密な言語調査をしなかった。作者自身による観察で判断するのがある。

9 梅広「文字表達與破音字問題」（中国語文 51 卷3期）を参照。

10 中国語学研究会編『中国語学新辞典』（光生館 昭和 54 年）の「破音」の項を参照。

11 以上述べた日本語漢字音は、沼本克明著『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）の p. 33～p. 5 を参照。

12 ここで、二様の音と言うと、『学研 漢和大字典』（学習研究社 藤堂明保編 昭和 52 年）によるもので、声調の違うものをさす。

補注：本論文に出る中国語羅馬字が、王天昌の前掲書の「国語常用字同音表」による。